

一枚のはがきまい

新美南吉にいみ なんきち

そのはがきが書かれたのは美しい四角な机つくえの上でした。熊くまのお人形や、緑色の時計や、青いおおいのかむさった電気スタンドなどものっかっている美しい四角な机の上でした。

そのはがきを書いたのはお手々の白いかわいい女の子でした。

——お母さん、ついでだからいなかのおとみちゃん
ところへも一本書きますよ。

——そうね、それがいいわ。
そこで女の子はこう書いたのです。

おとみちゃんおかわりありませんか。
せんだつてはリングを送っていただ
いてありがとうございます。
もう春がきますね。

それから女の子ははがきをうらがえして宛名あてなを書き
ました。

北海道、××群 △△村 字蟹江
森 吉太郎様方
とみ様
東京市大森区〇〇一五
石川 道子

そしてこの一枚まいのはがきは街角まちかどに立っているポスト
の口に投げこまれました。

女の子はその晩ばん、柔やわらかいベッドの中でお母さんに

いいました。

——お母さんあさって明後日にはもうあのはがきが北海道までゆくね、ほんとうにゆくんでしょうか。

するとお母さんは答えました。

——ちつとも心配しなくていいのよ、北海道くらいなんでもないわ。ロンドンへだって、パリへだって出せばゆくんですもの。

けれどこのはがきは先方へとどいたでしょうか。

東京の郵便局ゆうびんきょくから袋ふくろに入れられて汽車で送られたこのはがきはまず北海道の大きな郵便局につきました。そこから△△村の小さな郵便局へとどけられました。その郵便局でこのはがきはたくさんゆうびんぶつの郵便物といっしよにひとりの配達夫まいの手にわたされました。この配達夫がこの一枚まいのはがきを蟹江村かにえむらまで配達することになったのです。

この配達夫は大きな外套がいとうをき、大きな長靴ながぐつをはき、大きなかばんをかけているのでおとなのようにみえましたがほんとうはまだ小学校を出たばかりの少年でした。少年がなぜおとなの外套や長靴をつけていたのでしょうか。少年のお父さんが一月前から病気になって配達に出ることができないので、この少年がお父さんのかわりに配達夫になっていたからです。それで、お父さんの長靴や外套をつけていたのです。

少年はうけとったはがきをほかの郵便物といっしよに大きなかばんの中に入れて配達に出かけました。そして一冬中とけないでいたかたい雪を、ばりばりとふみくだきながら郵便物を配達してゆきました。つららのたれさがった家々の窓まどに美しい燈あかりがつきはじめたころ少年は一枚のはがきのほかはみんな配達してしまいました。のこった一枚というのは、東京からきたあのはがきでした。

少年ははがきの宛名をみてふっとため息をつきました。
た。

——蟹江か。

蟹江は小さな山を一つこした向こうの谷に四五軒の農家がかたまつてできているさびしい部落でした。そこへはめつたに郵便物はこないのでした。

少年は小さいけれど山を一つこえねばなりません。帰りは夜になってしましましょう。それに、北の方から雪をふくんだ雲がだんだんひろがってきます。

少年はいきたくありませんでした。けれどつとめだからいかねばなりません。

落葉松のあいだにつけられた細い道をふみしめふみしめ登ってゆくと、少年のあし音におどろいて道ばたの雪の上からぱつぱつと冬の雷鳥が白くとび立ってゆきました。

のぼればのぼるほど風がひどくあたりました。こおった風は眼にあたると涙を出させ、手にあたると指を赤く太らせ、耳にあたるとそれをちぎってゆくようにいたませるのでありました。

山のいただきをこすと傾斜が急になっていて、うっかりすると足がすべってぶつたおれることがありました。それで少年は足もとによく注意しておりていったのでした。それなのに少年はあやまって足をすべらせました。あおむけにたおれたかと思うと、少年の体はそのまま、だらだらと急な傾斜をすべって行って、どんとがけつぷちからくぼんだところへ落ちこみました。少年は立とうとしましたが左の足に力はいらないのでした。その足はじんじんといたみはじめました。

少年はありつたけの声をふりしぼって、

——おーいおーい、とよびましたが、その声はだんだんよわってゆきました。

少年の肩かたにぽつりとまったものがありました。それは一片いっぺんの雪でした。少年はそれをみてぎよつとしました。するとその一片の雪がいました。

——なぜこんなとこでじつとしてるのだ。

——左足が折れちやつたからさ。

——なぜ左足が折れたのだ。

——がけつぷちから落っこつたからさ。

——なぜがけつぷちのところへきたのだ。

——蟹江かにえへいかなきやならないからさ。

——なぜ蟹江へ、いま時分ひとりでゆかなきやならないのか。

——はがきを一枚まい配達しなきやならないからさ。

——そのはがきには重大なことが書いてあるのか。

——知らないよ。そんなことは。

——なぜ一枚のはがきのために蟹江までいかなきやならないのか。

——つとめだからさ。

——つとめ。つとめってなんだ。

——知らないよ、そんなことは。

そのうちに山の上へ黒いふろしきのように夜がかむさつてきました。夜といっしょに、かすりのような雪が空いっばいにふつてきました。

雪のやんだ明るいよく朝。

シヨベルを持った△△村の人びとが少年をさがしに山へやってきました。そしてがけ下のくぼんだところまできたとき、そこに、一枚まいのはがきを持った小さな手が冷たくなって雪の上に出ているのをみつけたのでした。

そのはがきにはこう書いてありました。

おとみちゃんおかわりありませんか。
せんだつてはリングを送っていただ
いてありがとうございます。
もう春がきますね。

「一枚のはがき」

※底本 新装版『新美南吉童話集1 ごん狐』
(2012年・大日本図書株式会社) 所収の「一枚の
はがき」をもとに一部、漢字表記とルビを編集し
ました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をさ
れる場合には、新美南吉記念館までご連絡くださ
い。(TEL : 0569-26-4888)